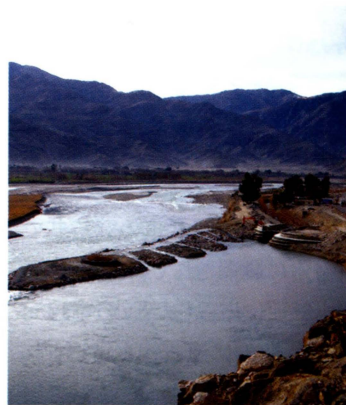


歴史的農業施設を、世界に、未来に

江戸時代の朝倉の農民が、現在のアフガニスタンの農民を救った



マルワリード取水口

寛政2(1790)年に山田堰が築造されてから220年後の平成22(2010)年、日本から遠く離れたアフガニスタンに、もうひとつの山田堰が完成しました。アフガニスタンとパキスタンで活動している福岡市の市民団体、PMS(平和医療団・日本)=ペシャワール会が、アフガニスタン東部のクナール州を流れるインダス川の支流、クナール川に山田堰をモデルにした石堰を築造し、マルワリード(真珠川)用水路を開削して、3,000haもの荒野を農地に変えたのです。

江戸時代、たび重なる旱魃に苦しみ、飢餓を克服するために大河に挑んだ朝倉の人々の勇気と苦闘が、時空を超えて、地球温暖化による旱魃に苦しむ現代のアフガニスタンの人々を救ったのです。



2003年12月 用水路掘削作業



2011年1月 用水路造り



2010年 砂漠貯水池



2014年 緑化した貯水池

世界に誇れる「山田堰」



PMS(平和医療団・日本)総院長
ベシャワール会現地代表

中村 哲



2013年 揚水車1号(4.6m)
1日 1500t



2013年 揚水車2号(5.5m)
1日 1200t

私たちPMS(平和医療団・日本)=ベシャワール会は、1984年(昭和59年)からアフガニスタンやパキスタンで復興支援活動続ける医療組織で、主にアフガニスタンの貧民層の診療に携わってきました。

2000年(平成12年)以降は、戦乱に加えて旱魃に襲われ、おびたしい人々が飢饉で死にました。問題は医療以前でした。清潔な水と食べ物さえあれば、犠牲を出さなかったでしょう。そのため、飲料水を求めて井戸掘りに奔走し、6年間で1,600ヶ所に水源を得ました。

2003年(平成15年)からは食料生産の用水を得るため、全長25.5kmのマルワリード用水路建設に着手しましたが、「取水技術」の壁に突き当たっていました。アフガニスタンのどこでも、誰でも多少の資金と工夫で出来るものが理想です。

解決は意外なところにありました。近世・中世日本の古い水利施設です。当然全て自然の素材を使い、手作りで作られたものです。

福岡県朝倉市の「山田堰」との出会いが決定的でした。筑後川もクナール川も規模こそ違え、急流河川、水位差が極端な暴れ川という点で似ています。「傾斜堰床式石張堰」を調べれば調べるほど、他に方法がないと確信しました。「山田堰」をモデルに2003年3月～2010年2月までの7年間を費やし、マルワリード用水路

全長25.5kmが開通、広大な荒廃地3,000haが農地となり、農民15万人が生活するまでに復興、新開地の砂漠で田植えが出来るまでになりました。

自給自足の農業国・アフガニスタンの水欠乏と貧困は、近年の地球温暖化による取水困難が深く関係しています。現在、「山田堰方式」を隣接地域に拡大、荒れた村々を次々と回復し、60万の農民、1万6,000haの農地が恩恵を受けています。

「山田堰」が時代と場所を超え、多くの人々に恵みをもたらした不思議。朝倉の先人に、ただ感謝です。技術的に優れているだけでなく、輝くのは、自然と同居する知恵です。昔の日本人は自然を畏怖しても、制御して征服すべきものとは考えなかった。治水にしても「元来人間が立ち入れない天の聖域がある。触れたら罰が当たるけれど、触れないと生きられない」という、危うい矛盾を意識し、祈りを込めて建設に臨んだと思われます。その謙虚さの余韻を、「治水」という言葉が含んでいるような気がします。

寛政2(1790)年、測量技術も重機も無い時代に造られた「山田堰」、自然と調和し生物と共存する「山田堰」は、紛れもなく日本が誇る「歴史的農業遺産」です。この堰が時を超え、現代の私たちに語りかけるのは小さくありません。国内外に広く知られ、輝き続けて欲しいと心から願っています。